

仏教的文学観の分類とその検討

——和歌・歌論——

沙加戸 弘

古来、仏教において文学は狂言綺語であった。唾棄すべきものであり、出離解脱の妨げであった。にもかかわらず、文学に心惹かれる人々が生み出した文学観が仏教的文学観である。したがって、観念的には、仏教的文学観は文芸のどのジャンルにも成立しうるものである。が、実際はそうではなかった。

日本文芸のさまざまな分野の中、その歴史において仏教と深く関わりを持ち、かつ最も激しい摩擦を起したのは和歌の分野であった。それは、仏教の宣布を目的とする説話や、信仰の表白を目的とする和讃、あるいは享受者を婦女子とする物語と異り、その性格として抒情性を多分に持っていたこと、およびその作家・享受者がその時代を代表する知識人であり、狂言綺語という批判に鋭敏であったこと等に起因すると考えられる。

さらに、和歌は、末法突入と言われた永承七年を基準にしてそれ以前約五十年、それ以後約二百五十年の、併せて四百年をその全盛期としている。この流れを概観する時、末法突入という一瞬を回転軸に、大きくその潮流の方向が変わったのを知ることができ。つまり、時代が下るにつれて、和歌ひいては文芸全体の中に、仏教思潮が構造的に入り込んでいった形跡を、さまざまの資

料に明らかに辿ることができるのである。

以上のような理由から、和歌においては、仏教的文学観の種類も量も、他の文芸ジャンルとは比較にならないほど多い。まず、それらの仏教的文学観を分類してみよう。

一、和歌罪惡論

二、和歌容認論

三、和歌助業論

(イ) 和歌は仏道修業の一部

(ロ) 和歌は観念の助縁

四、和歌即仏道論

(イ) 和歌陀羅尼説

(1) 和歌は仏言

(2) 言語の咒力

(3) 音楽性

(ロ) 諸法実相説

(1) 狂言綺語即仏道

(2) 一切は仏の顕現

(イ) 形式説

(1) 三十一字

(2) 五句

(3) 六体

(4) 六義

(ロ) 神告・夢告説

- (1) 住吉明神
(2) 熊野明神

(ホ) 法楽

右の分類全部について論述するのは無理なので、今四番目の和歌即仏道論の中から、二、三について略述してみたい。

まず、最初に問題になるのは、和歌陀羅尼説である。和歌は日本の陀羅尼であるという考え方で、狂言綺語に対しては反射的に和歌陀羅尼と答えるほど、文芸思潮研究においては一般的な位置を保ち得ている仏教的文学観である。表のように、三つの根拠に分類することができる。その(1)の、和歌は仏言であるから陀羅尼である、とする説を見てみよう。この説では、藤原俊成の『古来風体抄』を挙げなければならない。『古来風体抄』では、和歌の歴史の条に、聖徳太子と片岡山の飢人との贈答歌、行基菩薩と波羅門僧正との贈答歌等を記している。聖徳太子の片岡山の説話はあまりにも有名で、多くの説話集に採録されている。結局この飢人は達摩大師であり、その本地は文珠菩薩であったということになるのであるが、このような説話を記したあとに俊成は、伝教大師の歌を挙げ、そのあと、

かかれば、この国に生れもし、来りもする人は、権者も正者も、皆歌をばよむ事となれるべし

と述べている。「権者も正者も」、つまり仏・菩薩の権化も聖も、この国ではすべて和歌をよむこととなっているというのである。ここに和歌仏言説の成立を見ることができよう。

次に、形式による和歌即仏道論を見てみよう。形式説による和歌即仏道論とは、和歌の持つているさまざまの形式、たとえば短歌の三十一字、五七七七の五句、あるいは長歌・短歌・旋頭歌等の歌体、そういったものを仏教教義と結びつけて、和歌のそれらの形式は仏教教義をあらわしているものであると結論づけるものである。したがって、当然の事ながら、和歌だけに成立する文学即仏道論である。従来の和歌史では、この形式説は牽強附会の過ぎたものとして低く見られ、かつ簡単にすまされてきたきらいがある。しかし、牽強附会という点から見れば他の論も、大差はないとしなければならない。文学観研究として仏教的文学観を考える場合には、文学観成立の背景を明確にし、形式説もまた文芸思潮の流れの中に位置を定めるべきであろう。

この形式説も非常に数が多い。三十一字の論を例としてとりあげてみたい。定家仮託の歌論書『三五記』には、

今この歌をいふに、先三十一字に定めたるは、如來の三十二相にかたどれり。如來は三十二相といへども、頭れては三十一相なり。無見頂相は更にはれず。かるがゆゑにあらはれたる相好にかりにならずへて三十一字とするなるべし。

とあり、如來の三十二相を根拠とする三十一字の形式説が展開されている。三十一字に関しては、もう一つ『沙石集』が、『大日経』の前六卷三十一品を表わしているのだとする説を立てている。

最後に、法楽にふれておきたい。神仏への手向けという意味での法楽による和歌即仏道論は、仏教的文学観の発生時代から存在

し、仏教的文学観の進展を吸収して成長し、他の仏教的文学観が衰微したあとも根強く残った。一面から言えば仏教的文学観の一つ、一面から言えば仏教的文学観の総合的到達点、後世から見れば仏教的文学観の余波ということになろう。

仏教論と歌論の両方の性格を持ち、歌論史の中に特異な位置を占める『野守鏡』は、全巻を通じて仏教と和歌の関連を、さまざまの説を立てて執拗に述べているが、それにもかかわらず、下巻の最初に、

すでに法楽のために、略頌の心をばかたはし申し侍りぬ

と記るし、仏教的文学観を成立せしめる多くの説とは別に、と言うよりも全体の根底に法楽の考えがあることを示している。つまり、多くの仏教的文学観、和歌即仏道論の中で、この法楽だけは、独立の説とは言い難いのである。それを裏書するように、中世を過ぎると、仏教的文学観は、その中に他の論を包括するような形で法楽だけになり、さらに近世になると、法楽も形式だけという結果になるのである。

昭和五十年年度

特別研究生研究発表要旨

プラトン『テアイテトス』研究序説(二)

——知識と「真なる思い」——

寛 武

この序説は昨年度と同じ機会に発表した拙論「プラトン『テアイテトス』研究序説——知識と感覚——」に続くものであるから、この序説要旨も昨年度のもの（『大谷学報』第五十五巻第三号）を承けている。

さて知識は、感覚のうちに探究さるべきではなく、むしろ魂が有るものから自ら独りで掛かり合っているときに魂がもつところの「思い」のうちに探究さるべきである、とされた (T6a)。この思いを知識と同一視しようとするのが、事実上、テアイテトスの第二の知識説となる。すなわち、思いには真なるものと虚偽なるものがあるから知識は「真なる思い」(187b)だ、とテアイテトスは言うのである。しかしソクラテスは、「ひとが虚偽を思う」とは如何なる情態のことなのか、またそれは如何なる仕方であるか、如何なるかを言えずに行き詰っていると言う。かくしてソクラテスとテアイテトスとの対話は「真なる思い」の問題から、(それを知識とみなす以上)必然的に、「虚偽なる思い」の